

## 秋田駒ヶ岳の火山活動解説資料（令和4年3月）

仙台管区气象台  
地域火山監視・警報センター

今期間、火山活動に特段の変化はありませんでした。

山頂付近では、2017年9月以降、火山性地震の発生頻度がやや高い状態で推移しています。そのうち女岳<sup>めだけ</sup>付近では地熱活動も継続的に認められますので、中長期的な火山活動の活発化に留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

### ○活動概況

#### ・噴気など表面現象の状況（図1～4、図5-①）

仙岩峠監視カメラ（東北地方整備局）による観測では、女岳の噴気は22日に一時的に高さ200mとなりましたが、その他の期間では30m以下で推移し、噴気活動は概ね低調に経過しました。同観測点の赤外監視カメラによる観測では、女岳の地熱域に特段の変化は認められませんでした。

16日に陸上自衛隊東北方面隊の協力により実施した上空からの観測では、これまでの観測と比較して、女岳付近の噴気や地熱域の状況に大きな変化は認められませんでした。

#### ・地震や微動の発生状況（図5-②～⑤、図6、図7）

山頂付近が震源と推定される低周波地震が2回発生しました。

山頂付近では2017年9月以降、そのうち女岳付近では2018年9月頃から火山性地震の発生頻度がやや高い状態が継続しています。

火山性微動は観測されませんでした。

#### ・地殻変動の状況（図8、図10）

火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

### ○活動評価

秋田駒ヶ岳では、今期間、顕著な地震活動や地下浅部の膨張等を示す変化は観測されていません。しかし、中長期的には2009年頃から2015年頃まで地熱域の拡大が確認された女岳周辺で熱活動が継続しているほか、2017年9月以降、山頂付近での火山性地震の発生頻度がやや高い状態で推移し、低周波地震の発生や女岳付近の地震活動も継続するなど、火山活動がやや高まった状態で経過していることから、今後の活動の推移には留意が必要です。

---

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（[https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)）で閲覧することができます。

次回の火山活動解説資料（令和4年4月分）は令和4年5月12日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省東北地方整備局、国土地理院及び東北大学のデータも利用して作成しています。本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の「数値地図50mメッシュ（標高）」及び「電子地形図（タイル）」を使用しています。

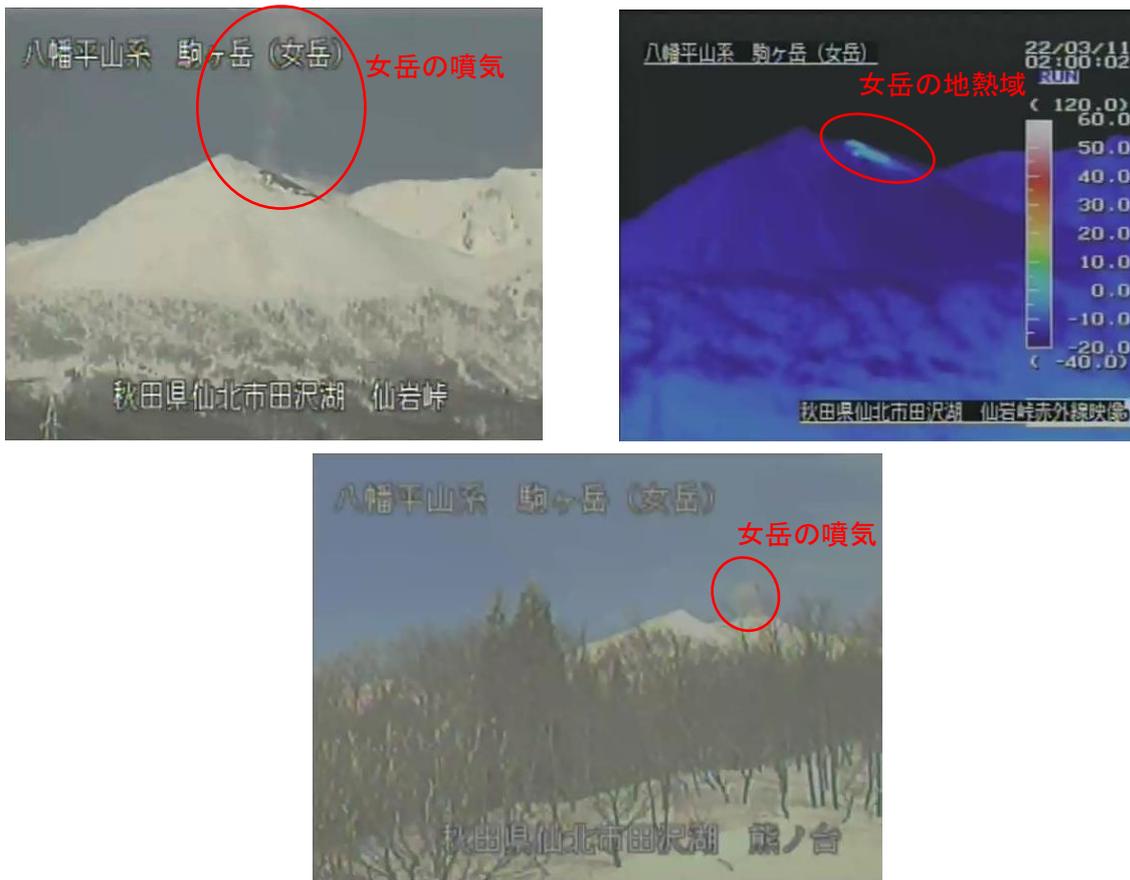


図1 秋田駒ヶ岳 女岳周辺の噴気と地表面温度分布の状況

- ・上図：東北地方整備局が設置している仙岩峠監視カメラ（女岳山頂の南約5 km）の可視（3月22日）及び赤外映像（3月11日）です。
- ・下図：東北地方整備局が設置している熊ノ台監視カメラ（女岳山頂の南西約4 km）の映像（3月22日）です。

女岳からの噴気の高さは、22日に一時的に200mとなりましたが、その他の期間は30m以下で推移し、噴気活動は概ね低調に経過しました。

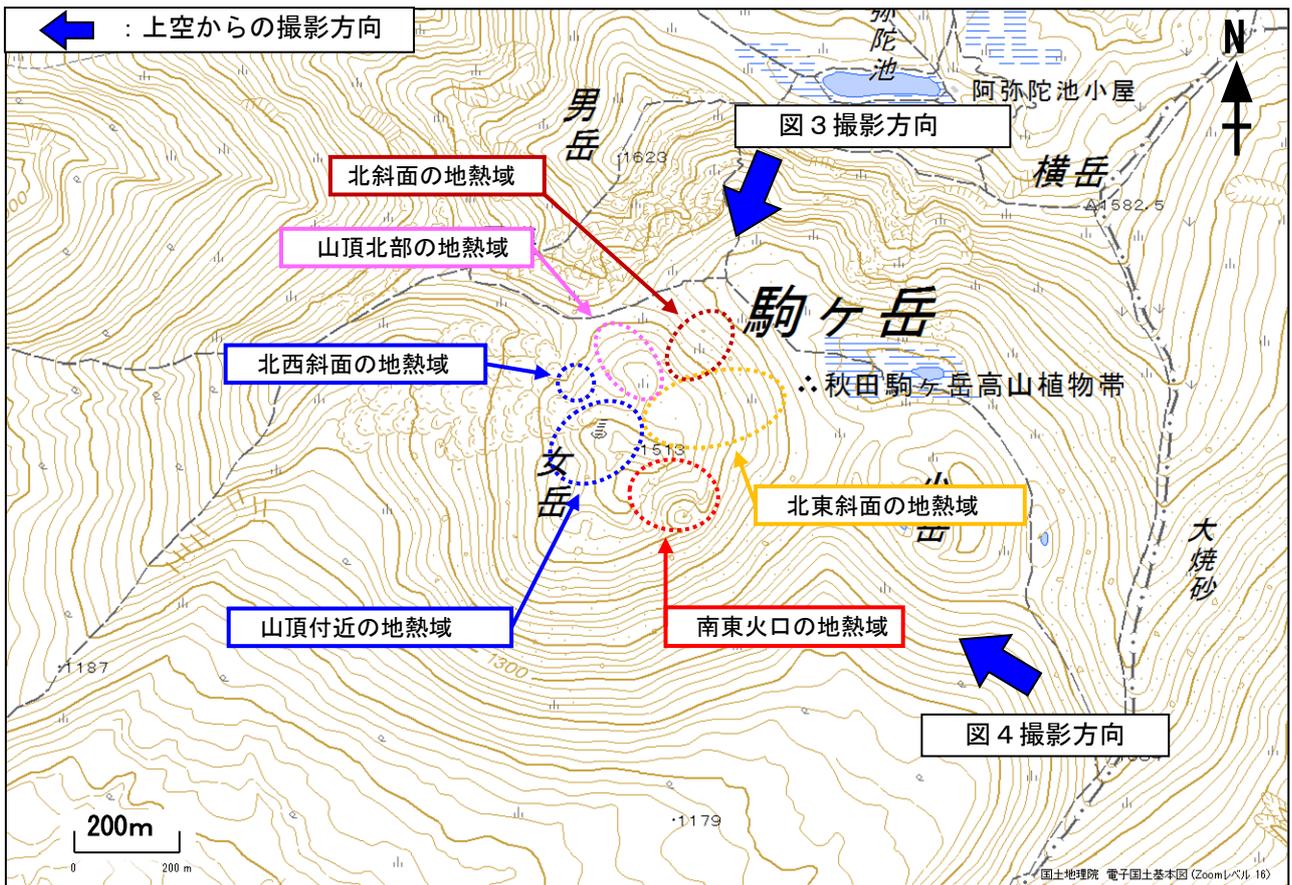


図2 秋田駒ヶ岳 女岳の地熱域の分布及び写真と地表面温度分布撮影方向

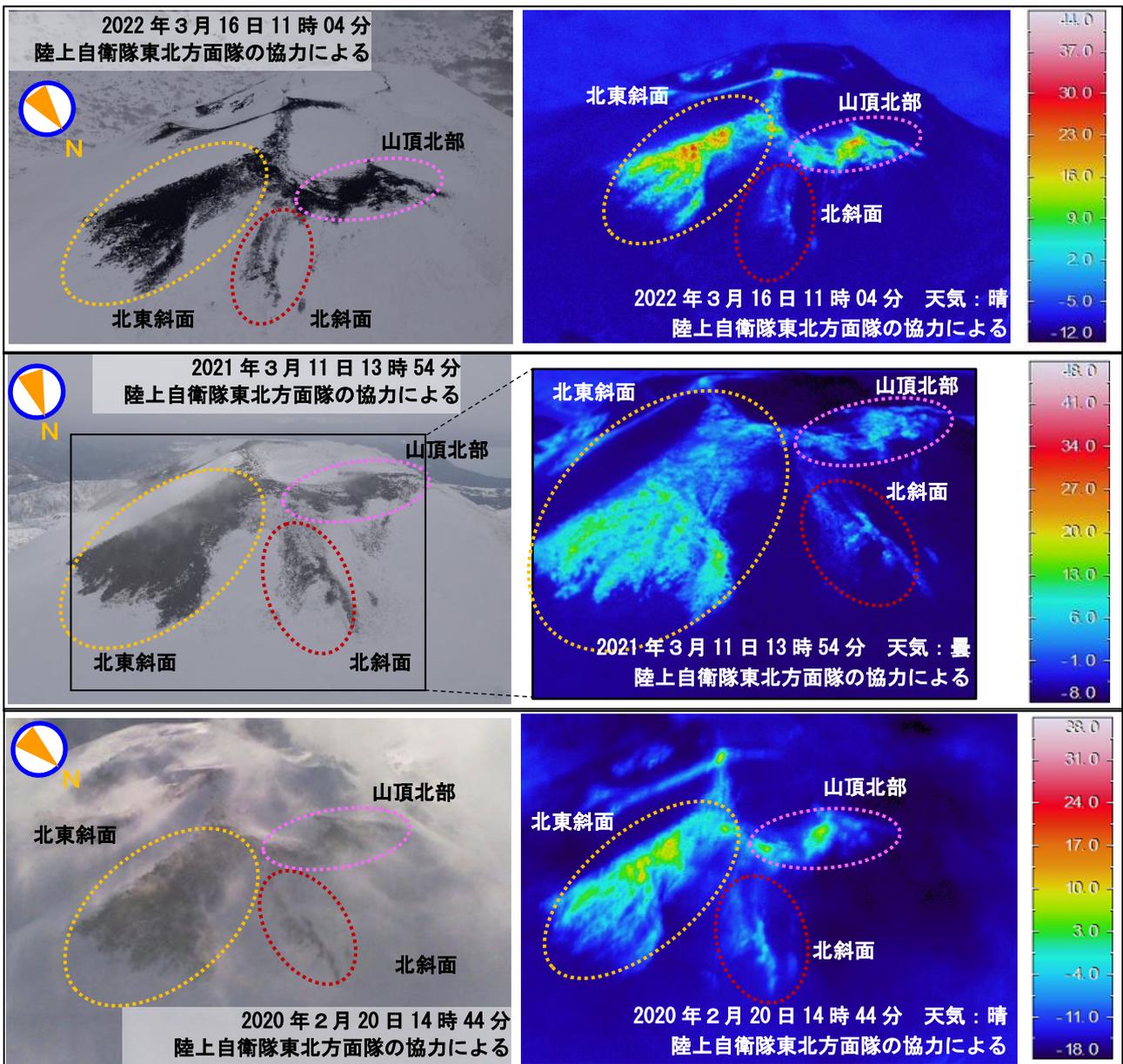


図3 秋田駒ヶ岳 上空からの女岳山頂北部、北東斜面及び北斜面の状況と地表面温度分布

・図中の破線の色は、図2の破線の色に対応します。

※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。

※2021年、2020年の観測では、雲や噴気等の影響により、今回の観測に比べて温度がやや低めに表示されていると考えられます。

女岳山頂北部、北東斜面及び北斜面の地熱域の状況に大きな変化はなく、目視による観測では噴気の状態に特段の変化は認められませんでした。

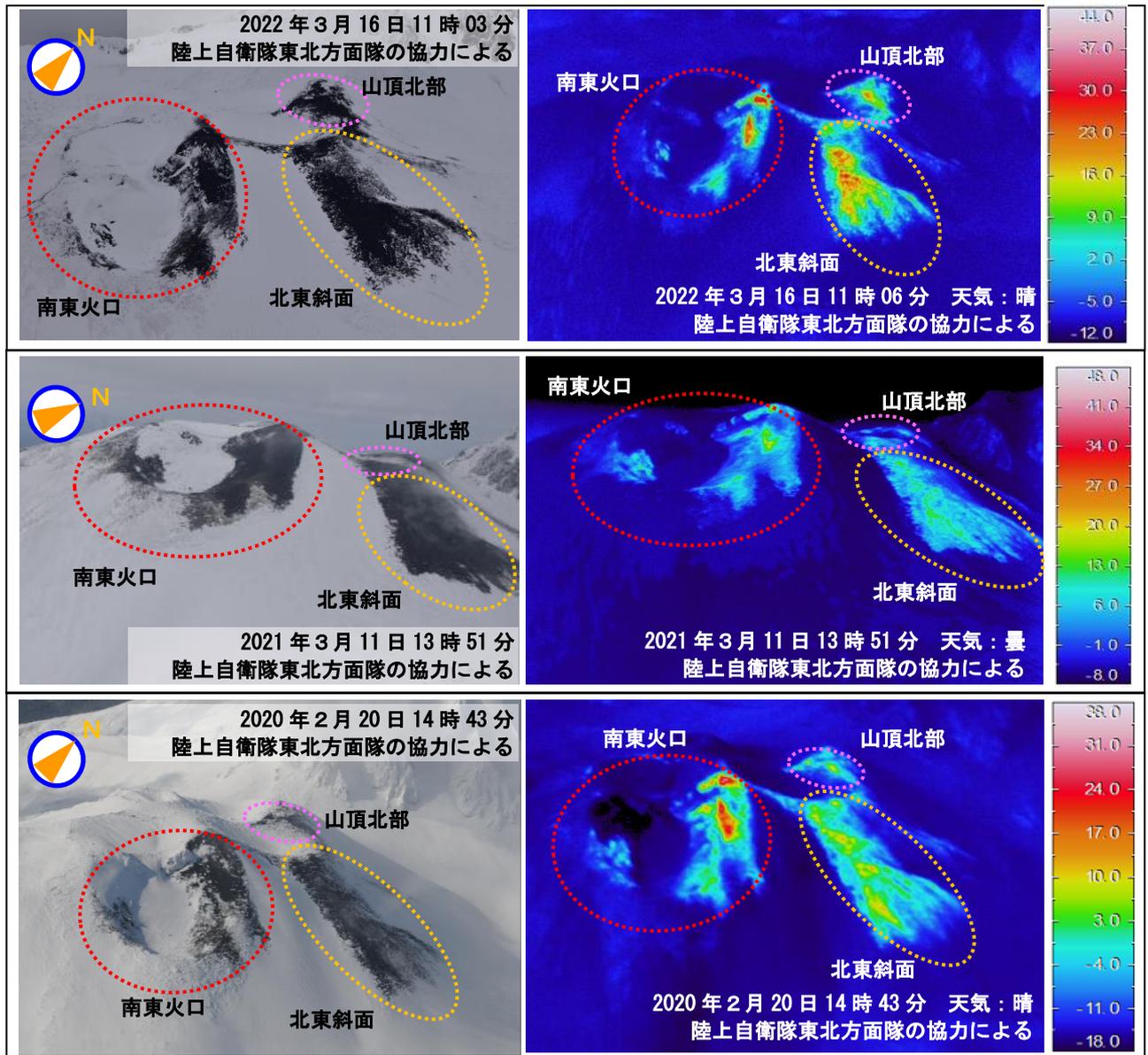


図4 秋田駒ヶ岳 上空からの南東火口の状況と地表面温度分布

- ・ 図中の破線の色は、図2の破線の色に対応します。
- ※日射の影響により、裸地等では表面温度が高めに表示されています。
- ※2021年、2020年の観測では、雲や噴気等の影響により、今回の観測に比べて温度がやや低めに表示されていると考えられます。

南東火口の地熱域の状況に大きな変化はなく、目視による観測では噴気の状態に特段の変化は認められませんでした。

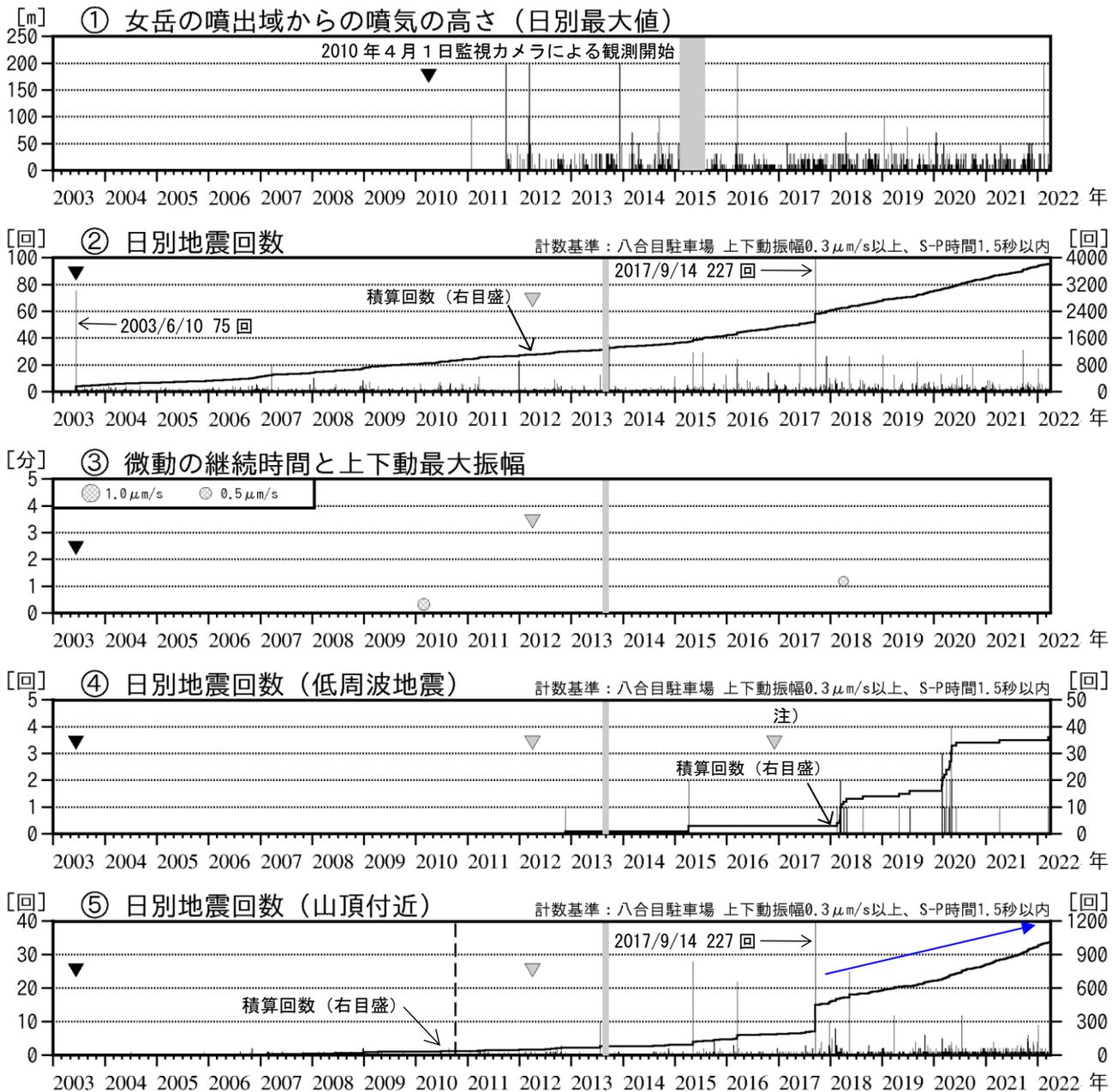


図5 秋田駒ヶ岳 火山活動経過図（2003年6月～2022年3月）

- ・地震計数に使用した観測点は次のとおりです（角カッコ内は地震回数計数の計数基準）
  - ▼観測開始 2003年6月9日～ 東北大学秋田駒ヶ岳観測点 [振幅 $0.5\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.5秒以内]
  - ▽ 2012年4月1日～ 八合目駐車場観測点 [振幅 $0.3\mu\text{m/s}$ 以上、S-P時間1.5秒以内]
- 注) 姿見ノ池西観測点の運用開始（2016年12月1日）以降、検知力向上により低周波地震を判別しやすくなっていると考えられます。
- ・⑤は「山頂付近」で発生したと推定される地震の回数を示しています（「山頂付近」は「女岳付近」の回数も含まれます）。2010年10月の八合目駐車場観測点運用開始（グラフ中の破線）以降は、山頂近傍に観測点が配置されたことにより、山頂付近で発生している地震を概ね判別できていると考えられます。
- ・図中灰色部分は欠測を表しています。

山頂付近では、2017年9月以降、火山性地震の発生頻度がやや高い状態で推移しています（⑤青矢印）。

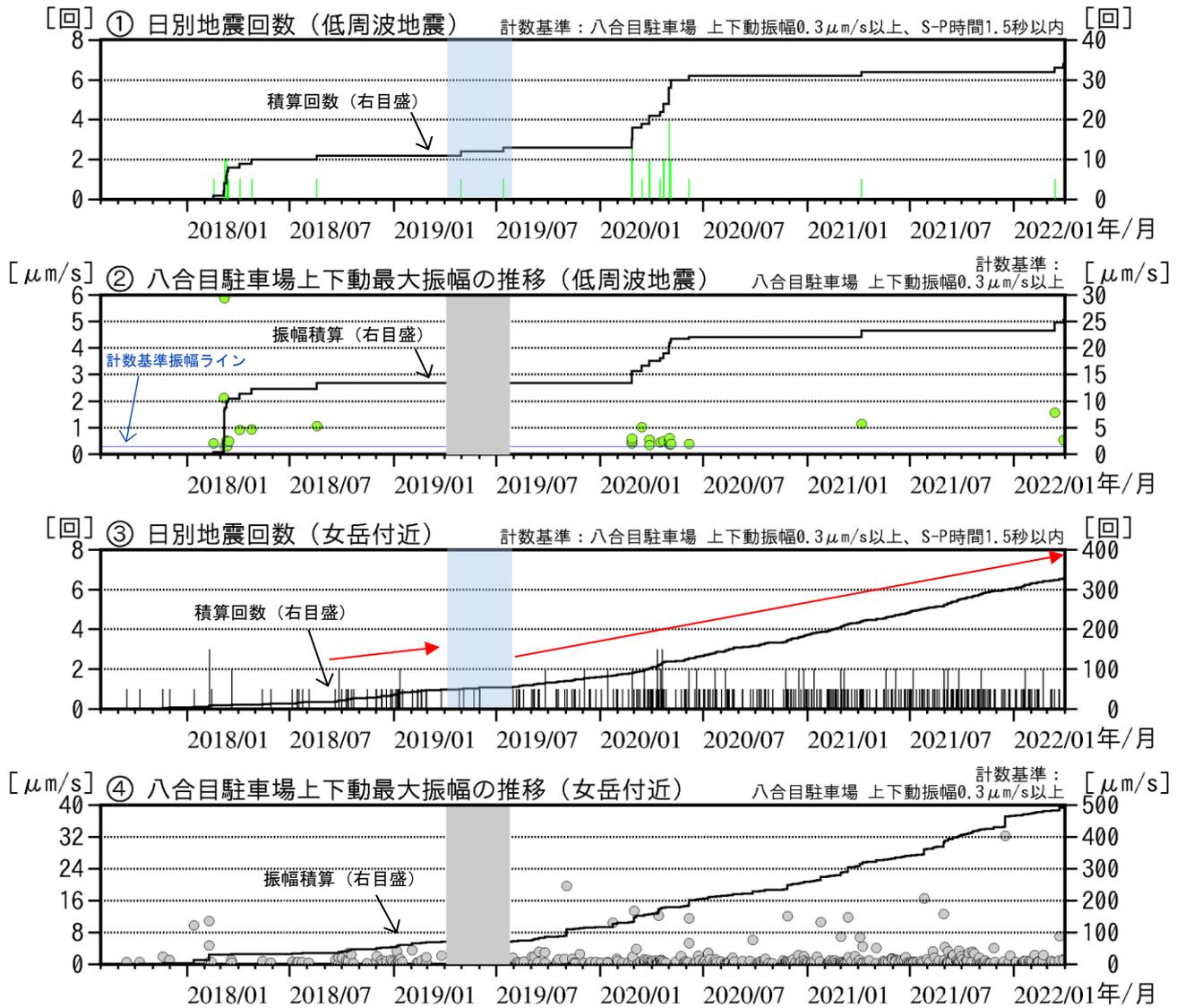
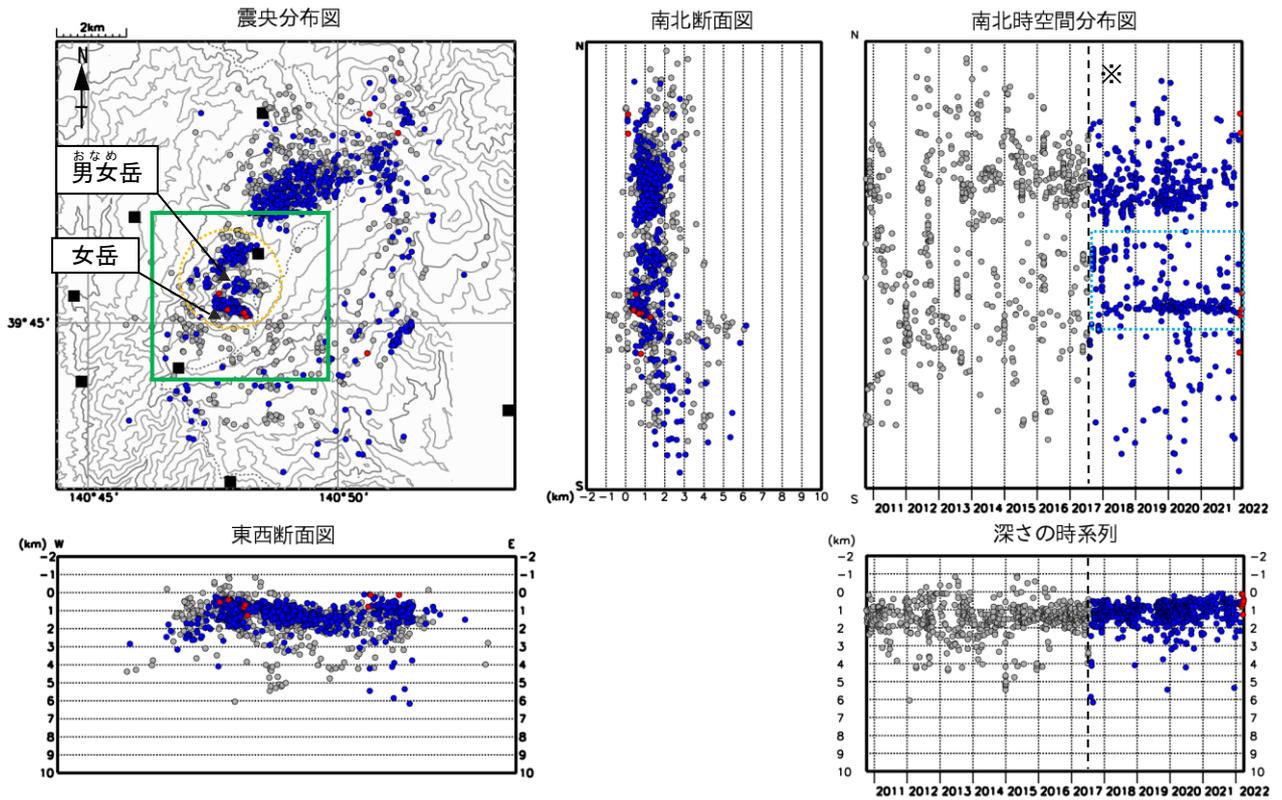


図6 秋田駒ヶ岳 低周波地震及び女岳付近の日別回数と最大振幅（2017年8月～2022年3月）

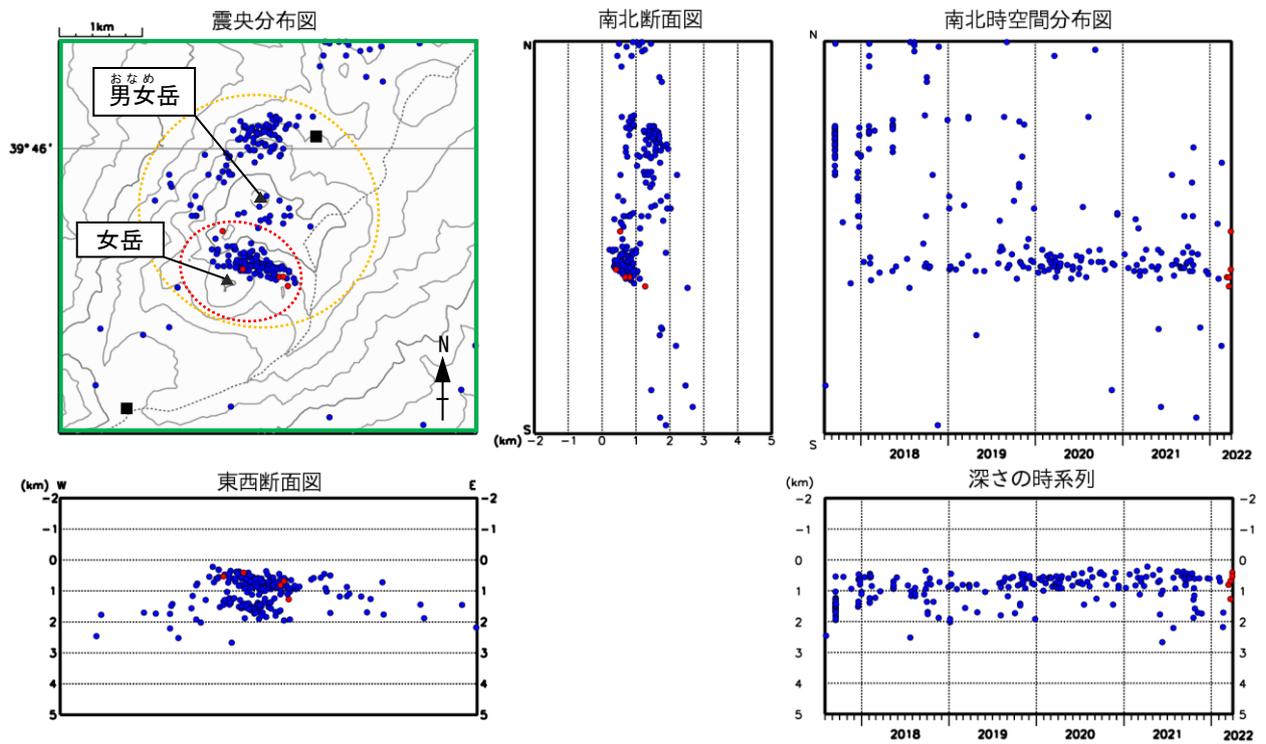
・灰色部分は八合目駐車場観測点の欠測期間を示しており、それにより地震の検知力が低下している期間を青色で示しています。

今期間、山頂付近が震源と推定される低周波地震が2回発生しました。そのうち1回はこれまで観測した低周波地震に比べると、八合目駐車場観測点での振幅は大きいほうでしたが、その他の火山活動に特段の変化はみられませんでした。2018年9月頃から女岳付近の地震の発生頻度がやや高い状態で推移しています（③赤矢印）。

秋田駒ヶ岳（広域）2010年10月7日～



秋田駒ヶ岳（山頂付近拡大）2017年8月1日～



● : 2022年3月1日～3月31日   ● : 2017年8月1日～2022年2月28日  
 ● : 2010年10月7日～2017年7月31日   ■ : 地震観測点位置

図7 秋田駒ヶ岳 地震活動（2010年10月7日～2022年3月）

・ 橙破線及び赤破線の領域は、それぞれ「山頂付近」及び「女岳付近」としておおよその領域を示しています。  
 ※ 2017年8月1日から姿見ノ池西観測点を震源計算に使用しているため、山頂付近の震源のばらつきがそれ以前より小さくなっています（水色破線）。

女岳付近の火山性地震は継続していますが、今期間は少ない状態で経過しました。

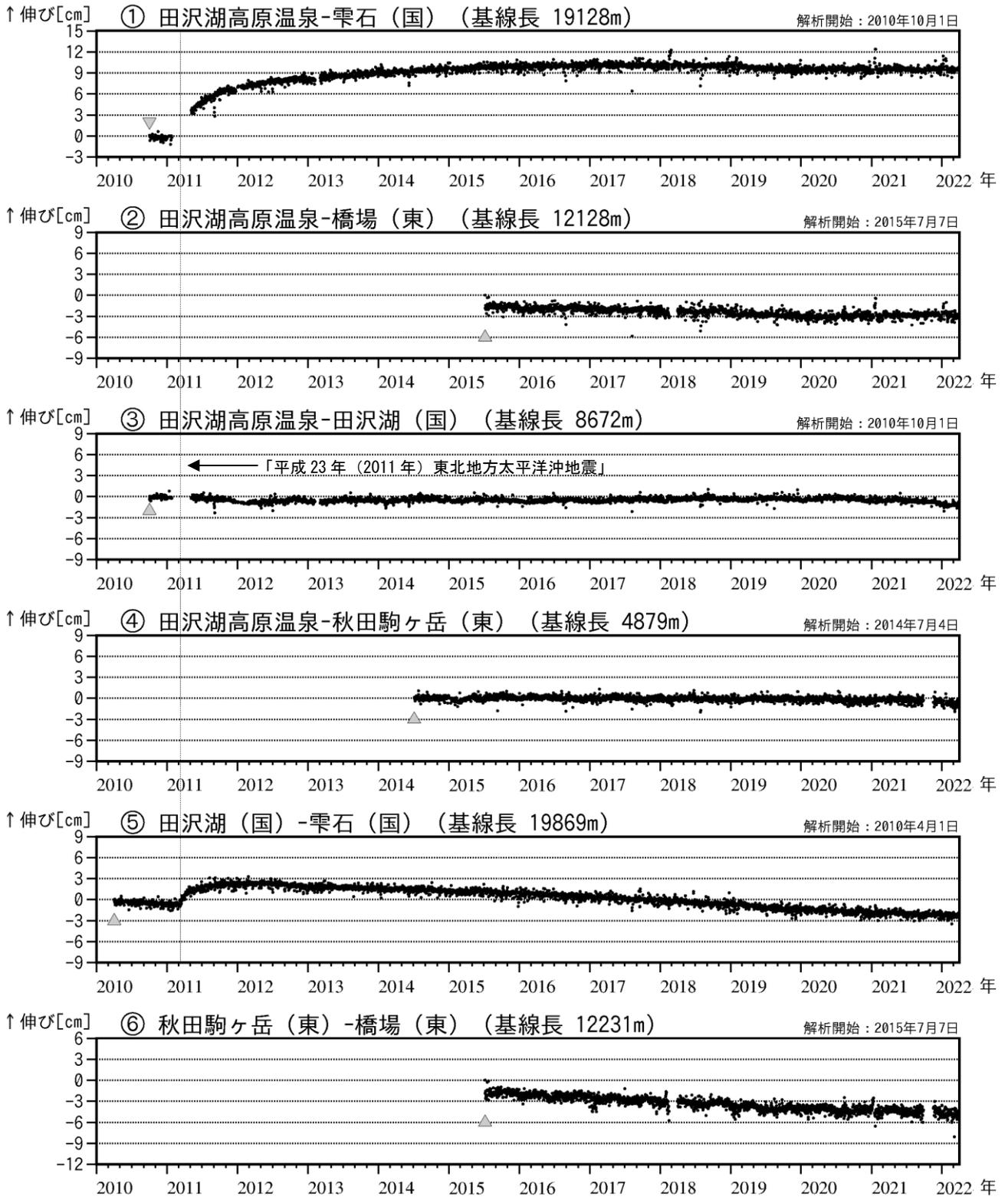


図8 秋田駒ヶ岳 GNSS 基線長変化図 (2010年4月～2022年3月)

- ・ ①～⑥は図10のGNSS基線①～⑥に対応しています。
- ・ 空白部分は欠測を示します。
- ・ (国)は国土地理院、(東)は東北大学の観測点を示します。
- ▼▲：解析開始を示します。

火山活動によると考えられる変化は認められませんでした。

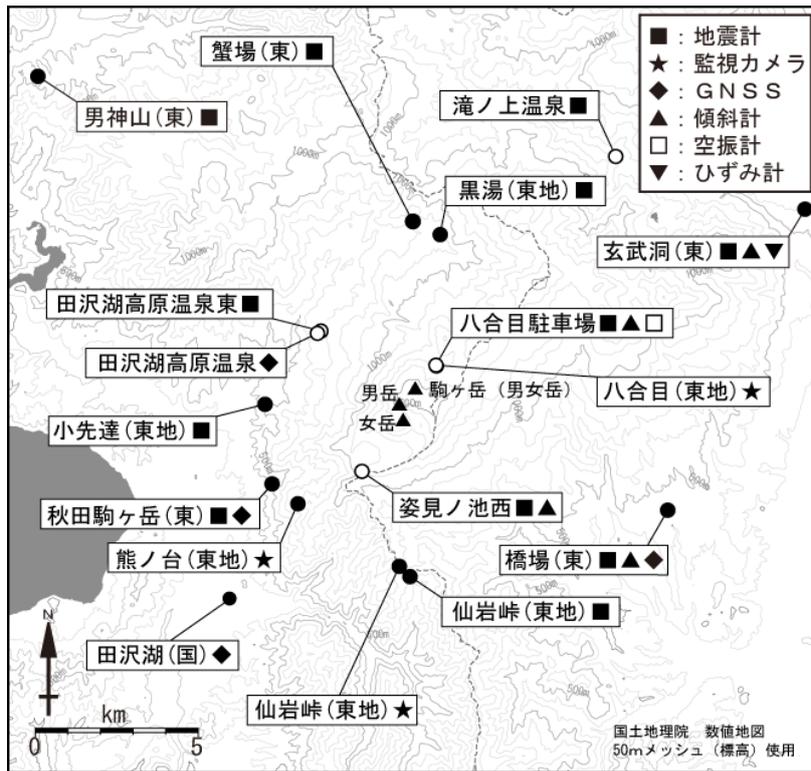


図9 秋田駒ヶ岳 観測点配置図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（東地）：東北地方整備局 （国）：国土地理院  
（東）：東北大学

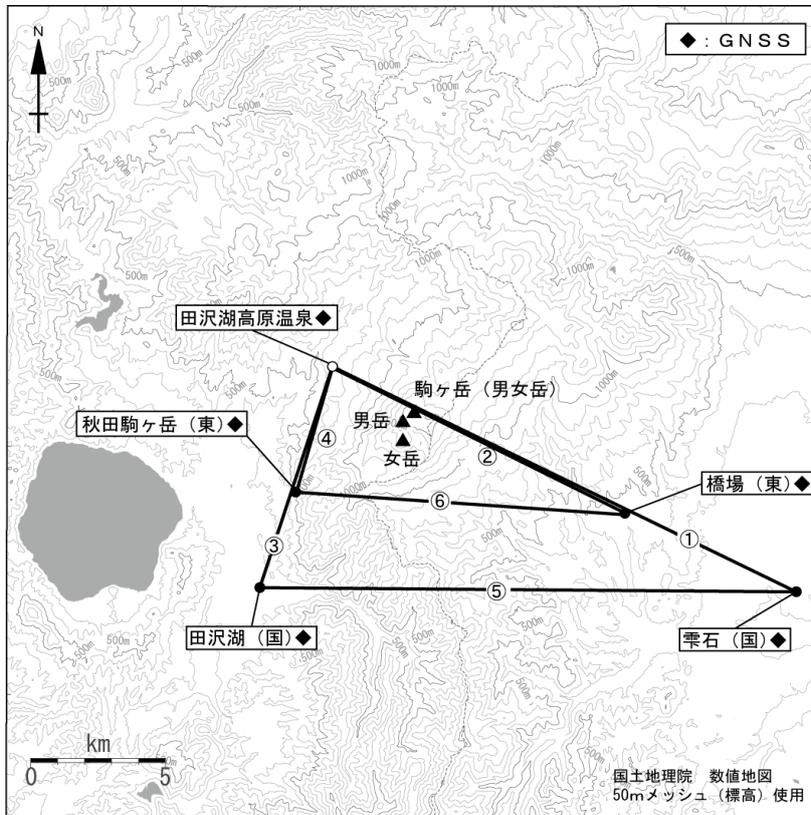


図10 秋田駒ヶ岳 GNSS 観測基線図

白丸（○）は気象庁、黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

（国）：国土地理院 （東）：東北大学